

イーディス・ウォートンと時代

——ピュリタニズムとのかかわりを中心に——

島津厚久

イーディス・ウォートン（一八六二—一九三七）は、「お上品な伝統」と呼ばれるピュリタニズムが浸透したニューヨークの上流社会で生まれ、育ったが、第一次世界大戦を契機とする社会の変動によって、その生まれ故郷も押し流されていく運命にあった。このような社会の変化に対するウォートンの反応を作品を通して眺めてみると、常に時代の流れと齟齬をきたさなければならなかった彼女の孤独な内面が浮かび上がってくるような気がする。

結婚式の三日前に、「結婚するとはどういうことなのか教えてほしい」と懇願する娘に、「絵や彫像をみれば男の人が女の人と違うようにできているということがわかるでしょ。」としか答えられないような、ピュリタニズムの権化ともいえる母親のもとで、まともな性教育すら授けてもらえなかったイーディスの結婚生活は悲惨なものであった。一九〇二年に夫婦揃ってマサチューセッツ州レノックスに移住して以後、彼女の夫は性交渉がないことから欲求不満がもとで重度の精神障害に陥り、一九一三年には離婚のやむなきに至っている。この体験が、生涯にわたって彼女の心の傷として残り、結婚問題を扱った短編や一連の所謂幽霊物語等に反映されていることは多くの識者によって指摘されているところであるが、同時に、このことがピュリタニズムに対する反発心を彼女に植えつけたことに注目しなければならぬ。『欲楽

の家』（一九〇五）、『砂州』（一九一二）、といった長編においても、ウォートンは自分の出身階級である上流社会のみかけ倒しのお上品さを批判、諷刺しているが、彼女のピュリタニズム批判の姿勢は、短編の方によりはっきりと現われている。たとえば「眼」（一九一〇）において、彼女は、カルウィンという、ピュリタニズムの始祖カルヴァンを彷彿とさせる人物の自己反省の欠如、彼の内側にあるエゴイズムを指摘し、ピュリタニズムの偽善を告発している。この作品は、これまで二度にわたって恐ろしい眼の幽霊に苦しめられていたカルヴァンが鏡に映った自分の顔を見て、それが自分の眼であったことを知る、という場面で終わるのだが、人間の内なる邪なものを明らかにするものとしての鏡のイメージは、ホーソンに特徴的なものであった。さらに、ホーソンもこの頃のウォートンと同様に、ピュリタニズムの偽善を摘発することに意を用いた人であった。このように、初期のウォートンには、技法や思想の上でホーソンとの類似がみられるのである。また、夫婦間の緊張が極点に達した一九一一年に、ウォートンは、『ニューイングランドの農村でおきた愛欲の悲劇』『イーサン・フロウム』を出す。当時の心境について彼女は自叙伝の中で、『メアリ・ウィルキンズヤセラ・オーン・ジュエットのバラ色の眼鏡を通して見た光景とは似ても似つかない、ニューイングランドの真の姿を描くことがこの本の執筆の動機であったと言いつつ、自分が知っていた西マサチューセッツでは、「長い村道にある色のついていない木の門の裏側や、近隣の丘の上にある孤立した農家の内側に狂気や近親相姦、澱んだ精神的、道徳的飢餓が隠されていた」と述べている。これは、ニューイングランドのピュリタニズム的禁欲主義という一般のイメージに対するアンチテーゼ

であるわけだが、晩年に来し方を穏やかに振り返った感のある自叙伝においてすら、「狂気」、「近親相姦」、「精神的、道徳的飢餓」など相当強烈な言葉が用いられているのを見れば、一九一一年当時のウォートンのニューイングランド、そしてそれが象徴するピューリタニズムへの反発の強さが窺われる。しかも、これらの言葉が、ニューイングランドに住んでいた頃ウォートンを苦しめていた、夫の精神障害を連想させるものであることを考えると、自分の夫婦生活を露骨に語ろうとはしなかったウォートンが、ここでニューイングランド一般にかこつけて、自分のピューリタニズム批判の根底に破綻した夫婦生活があったことを告白しているように思えるのである。ウォートンが影響を受けたホーソンの場合も、彼の文学の根底には彼自身の家系に流れるピューリタンの暗黒面（父方の祖先に「魔女狩り」の判事がいたり、母方の祖先に近親相姦があったりしたこと）に対する思いがあるとも言われており、そうすると、技法、思想のみならず人間存在の根底的な部分でも二人は通じ合うことになり、興味深い。

ところが、第一次世界大戦が、ピューリタニズムに対する彼女のこのようにホーソンのともいえる批判の姿勢を転換させることになった。この戦争により、上流社会は崩壊し、性風俗をはじめ社会は大幅な自由化に向かう。このような新時代は、ウォートンの眼には無秩序で猥雑なものとして映り、それに対して、「お上品」で秩序だったかつての上流社会をノスタルジックに回顧するようになるのである。その傾向を最も簡潔に表わしているのが短編「ローマ熱」（一九三四）である。この作品の主人公グレイス・

アンズレイは、グレイスに「恩寵」という意味があることからわかるように、古いニューヨーク上流社会を秩序だてていたピューリタニズムを体現した女性である。この“old fashioned”で“innocent”な女性が、万事に派手で自由奔放なスレイド夫人を、「私は（あなたのかつての夫と関係して今の娘）パーバラを得ました」という一言でへこませる最終場面は、ピューリタニズムにも清濁があることを認めた上で、なおそれを肯定しようとするウォートンの姿勢を示している。スレイド夫人的な軽薄な人間が跳梁跋扈する新時代に対するウォートンの嫌悪と、グレイスに体现される古きよき時代に対する肯定的態度がこの作品からは読み取れるのである。その点では、長編『無垢の時代』（一九二〇）も同様である。奔放であやしげな魅力を発するエレンを斥けて妻の座を守り通す無垢な乙女メイの力強さは、グレイスのそれと通じ合うものである。

主にピューリタニズムに対するウォートンの姿勢の変化を見たが、ピューリタニズムの勢いが強い時は反発し、弱くなると逆にノスタルジーにかられるという具合に、彼女は常に時代の流れと親和できなかつた。新旧両時代の狭間に落ちた彼女の孤独は、『母の償い』（一九二五）の主人公で、かつて馳け落ちしてニューヨークを出奔し、今また二〇年代のそれにもなじめず、結局夫、娘、以前の愛人、求愛者のすべてを失って一人漂泊の旅に出るケイト・クレフエンの孤独に重ね合わされている。

ウォートンは無器用にしか生きられない人なのであった。